

露呈した医療態勢の弱点

コロナの教訓

5月25日に新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言が全面解除され、世界保健機関（WHO）は日本の対策を「成功」と評価した。

日本は1858（安政5）年に即死病として恐れられたコレラなど、疫病に何度も苦しめられてきた。庶民は疫病除けの妖怪アマビエや山梨県立博物館が絵を公開したヨゲンノトリなど神秘的なものに救いを求めた。

いくつかの脆弱性が露呈した。マスクや防護服など感染症対策に必要な緊急物資の海外依存度の高さ、コロナ感染者用病床の少なさ、検査処理能力の限界などである。病院

や一般病床数は世界一多いのに、PCR検査が陽性でも自宅待機、ホテル療養に頼らざるを得なかった。

「三密」に加えて、真言宗の教えに基づいて守るべき自分の心の「三密」として身密（自分勝手な行動をしない）、口密（人の悪口を言わない）、意密（ところを惑わされな

い、他者に気配りをする）を説いている。肝に銘じたい。行き過ぎた効率化でゆとりをなくした社会は生き残れない。コロナで医療を取り巻く風景も変わる中、「安全・安心」を届けるには、どうすればよいだろうか。雨にぬれる美しいあじさいを見ながら、これからの病院のあり方を思索している。

医師や医学教育の制度もな

く、川柳では「やぶ医者は一

その理由は、民間病院が7割を占め、国の安全保障である医療の多くを民間が担っていることにある。厚生労働省の権限は限定的で、感染症患者の受け入れを民間に強制はできない。また、指定感染症のため、PCR検査は当初、保健所に限定されたうえ、病院崩壊が起きないようにとの判断も働いたかのように見える。処理能力の限界もあって件数が増えなかった。

しばらくは新型コロナウイルスとの共存は避けられない。福島県猪苗代町にある壽徳寺の住職、松村妙仁さんは、感染拡大防止のために避けるべき



埼玉よりい病院長 里見昭

さとみ・あきら 1944年生まれ、沖縄県出身。広島大医学部卒業後、武蔵野赤十字病院や琉球大学病院勤務を経て、96年、埼玉医科大小児外科教授に。埼玉医科大病院副院長も務めた。2016年から現職。消化器内科・外科も専門。著書に「小児外来で役立つ外科的処置」（中山書店）など。

しはらくは新型コロナウイルスとの共存は避けられない。福島県猪苗代町にある壽徳寺の住職、松村妙仁さんは、感染拡大防止のために避けるべき

病院管理者の立場やこれまでの経験をもとに、医療の問題点や患者・医療者の人間模様などを描いていきます。